

## 通訳者ヘンリー・ヒュースケンの足跡

—ニューヨークから下田、江戸—

鶴田知佳子

(東京外国語大学)

今の私たちの生活に至る上で、多くの外交交渉が行われて、そのかげには必ずそれを支えた人たちがいる。昨今の TPP（環太平洋パートナーシップ協定）然り、日米首脳会談然りである。歴史の中で、通訳者はその場におけるコミュニケーションを円滑にする役割を果たしてきた。日頃は忘れられているが、ふとした拍子に私達の周りには、通訳者が歴史の中で築いた足跡があることに気付かされることがある。一人の通訳者として、歴史を身近に感じるときでもある。

私がヘンリー・ヒュースケンの名前を初めて聞いたのは、当時国務省の通訳者であり、通訳教育も担当されていたデービッド・ソーヤー氏が、講演会のため、2007年2月に来日された折のことだ。国務省の通訳者のあいだでは、日米間の通訳をしたアメリカ側通訳者の先達として著名な存在であるということであった。講演会の翌日、東京にあるそのお墓を訪問したいという。ドイツ語の通訳者であるソーヤー氏は、Henry Heusken の名前を「ホイスケン」と発音されたので、当初誰のことかわからなかったが、書いてもらって「ヒュースケン」であるとわかった。翌日ソーヤー氏は、麻布光林寺にあるお墓にお参りされた。このようにソーヤー氏の来日のときその名前を知ったヒュースケンについては、「ヒュースケン日本日記」という本が出版されていることも知ったが、いつか読んでみようと思ったまま、忙しさにまぎれて忘れていた。

それが、2015年6月にたまたま伊豆・下田に友人たちと旅行に出かけ、下田の町を歴史ガイドの案内で探索する機会を得たときに思い出した。下田というと観光のハイライトは、初代アメリカ総領事であったハリス氏にちなんで名前が出てくる芸者で「唐人お吉」として戯曲で知られるお吉のお墓のある宝福寺、日米下田条約締結所である了仙寺、ペリー艦隊上陸の碑から了仙寺に至る開国当時の趣が残る川沿いの道「ペリーロード」である。また、このときに初めて知ったが、下田のこの寺は坂本龍馬にもゆかりのある場所であるということで、宝福寺には坂本龍馬の扮装をしたガイドさんが待っていて、案内をしてくれた。余談ながら、あらためて幕末の外交交渉においてはお寺が交渉場所となるなど、重要な役割を果たしていたことを実感した。この時は

---

TSURUTA Chikako, "An essay on Henry Heusken as an interpreter," *Interpreting and Translation Studies*, No.15, 2015. Pages 209-213. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

訪れなかったが、ハリス記念館が残る初代のアメリカ総領事館が置かれたのも玉泉寺というお寺である。

ハリスとともにヒュースケンが下田にやってきたのは1856年8月のことである。今からおよそ150年前のことで、アメリカは南北戦争(1861-1865)に向けて国が割れているころであった。今生きている人から5世代くらいさかのぼった頃のことになる。観光促進の観点からいうと、病気になったハリスが牛乳を所望したということで、日本で初めて牛乳を飲んだことにちなんで「ハリスさんの牛乳アンパン」なるものが作られて売られているなど、ハリスの名前もちゃっかり利用されている。一方、通訳者として私が気になったのは、「初代アメリカ総領事ハリス氏はいかにして日本側とコミュニケーションをとったのか」という素朴な疑問である。

通訳者の仕事は一般の人の生活には直接関係しないと思われることもあるが、決してそのようなことはない。歴史の重要な節目でも、誰かが外国と日本とのあいだのコミュニケーションを仲介して、意思疎通をはかっている。当時、日米修好通商条約をアメリカ全権使節としてまとめたタウンゼント・ハリスの通訳兼書記として仕事をしたヒュースケンの活躍がなかったら、条約締結には至っていないはずだ。実際に下田の町には、この条約のもとで同地を訪れる船が航海の折に欠乏した物資を補給し、調達するために取引を行った「欠乏所」のあとが残っており、ガイドの案内でその場所を訪れると当時の下田市民とアメリカ側の接点があった実感がわいてくる。また、当時の下田においては「遊歩権」として町を七里の範囲で自由に歩ける権利が認められていたようで、ハリスやヒュースケンもこの町を確かに歩いたに違いない。そう思うと俄然興味が湧いてきて、あらためて「ヒュースケン日本日記」(ヒュースケン, 1989)(以下、日記)を読むこととした。

そもそも、通訳兼書記という業務をどのようにみつけたのか、その当時の通訳の仕事の環境や勤務条件はどうであったのかが気になるところだったが、この疑問への答えの多くは「訳者まえがき」に多くみつかった。ヒュースケンがどのようにハリスのもとでの職を得たのかという経緯にドラマがある。アメリカの全権使節に雇われた立場であるが、求められた基本要件はオランダ語と英語の出来る人物であった。木村(2013)にあるように、当時はオランダ語の通訳と翻訳を幕府直轄都市の長崎で担うことを生業とした通詞と呼ばれる職能集団が幕末の変動期に、急に交渉の通訳にあたるように求められたものの、日本側が一番得意で自由に使いこなせる外国語はオランダ語であった。ヒュースケンは1832年にアムステルダムで生まれ、父の元で商人になるつもりであったが、父親がなくなり、病弱の母親を支えるため、1853年に21歳のときにアメリカに移住する。大きな期待をもってニューヨークにわたったが収入が少なく次々と仕事を変えるような生活だったところに、ハリスが英語とオランダ語のできる通訳を求めていることを知って応募し、採用される。1855年10月にニューヨークを出発、マデイラ島、南アフリカのケープタウン、セイロン島を経由し、1856年3月にペナンで待っていたハリスと初めて対面した。その後、同じ船でシンガポール、バ

ンコク、香港、広東、マカオを経て8月に下田に到着する。日記によると1856年6月12日、香港での記述で3年半前、父母の家に別れを告げたこと、合衆国を離れるつもりはなかったが、たまたま日本駐在のアメリカ総領事が通訳兼の書記を捜していると聞いて応募し、合衆国政府に採用され、軍艦に乗ってここまで来たと書いてある。

日記によると8月21日に下田湾に投錨している。そこから先は、本心としては領事館をつくることさえ乗り気でない日本側とのあいだにたつての通訳者の苦悩も日記に垣間みられる。1856年8月21日の日記によると、軍艦の提督に対して総領事を合衆国に連れ帰ってくれないかと頼むが、提督は自分の軍人としての任務は領事を下田に送り届けることとして受け付けない。住居として玉泉寺が提供されて住むこととなるが、交渉は遅々としてすすまない。1857年2月23日の日記によると、下田第一奉行が通訳の森山多吉郎を通じてお茶をたててもてなす様子が描かれている。5月23日の日記には、通訳の川原又兵衛が長崎に帰る森山多吉郎と交代するためにやってきたこと、通訳の役目は世襲で長男に引き継がれること、したがって通訳はすべて平戸の出身ということが書かれている。

再び、前述の書によるとアメリカ領事ハリスは、下田にいた通詞たちのオランダ語について「250年前も昔に使用したような古いオランダ語だ」と酷評し「条約や協約などに用いられるあらゆる言葉を全く知らない」(ヒュースケン, 1989, p.88)と述べている。しかし長崎で200年におよびルーティンな仕事を請け負っていた通詞に、近代的な外交体制化に見合った語彙や表現を用いて通訳や翻訳をすぐに実行せよというのはかなり無理があったことだ。もっとも現代でもそうであるが、思い通りに交渉が進まない通訳がうまく伝えていないのかという疑いをもつ場面もあり、日記の1857年8月28日の記述に、領事が江戸に赴いて將軍の手に手紙を渡したいという要求を奉行らに通訳してくれたかと尋ねる場面があり、ヒュースケンは何回も通訳し、その回数10回を超えるものであったと答えている。

幕府側の意図を伝えるところについては、日記によると通訳主任として書かれている森山栄之助(多吉郎)の活躍も、単なることばのやりとりの通訳以上に大きかったようだ。1857年9月2日の日記に、二人の奉行のところから使者として森山栄之助がやってきたという記述がある。また1857年9月4日の日記の記述には、「奉行たちが通訳主任の森山に腹を立てている、そのため彼は会議に出席していない。彼らは自分たちが提案を拒絶したと領事が主張するなら、それは自分たちの言葉を通訳が正確に翻訳していないのだと言うのである。そこで今日は他の通訳が二人きているが、その二人をあわせても森山一人分のオランダ語も知らないのである」とある。

ヒュースケンの行った任務には、1857年9月12日の日記にあるように市場(前述の欠乏所)で下田に入港した軍艦の士官の買い物の手伝いをすることや政府宛に通信文を書く記述がある。またこの日の日記には、軍艦の艦長が自分のために政府に口をきいて、ニューヨークを出発した日から起算して俸給を支払うように要求すると約束してくれたという記述もある。ようやく江戸に行くことが決まって出発のときには

1857年11月23日の日記で、香港から連れてきた4人の中国人に荷物を任せて、「大使が騎馬でつづく(中略)つづいて閣下一いや、わがド・ヒュースケン殿下がお馬を召され、二人の侍その他を従えて行かれる」とユーモアを交えて語っている。江戸にいく道中は天城山を越える道のりで、途中で11月23日には「大使と副奉行は身ぶり手まねを交えながら、オランダ語しかできない日本人の通訳に向かって、それぞれ英語と日本語で話し、互いに負けじとやりあっていた」というちょっと微笑ましい記述(ヒュースケン, 1989, p. 182)もあれば、11月24日の日記には「伊豆半島の山々を越えながら、日本人がアメリカ人のために下田港を選んだのは、日本のがわからみて島よりももっと近寄り難い一片の土地をアメリカ人に与えるためであったことがよくわかった。下田と日本の他の地方との間に横たわる天剣は、大規模な陸上交通を不可能にしているからである」という観察もみられる(ヒュースケン, 1989, p. 183)。

訳者まえがきによると、ヒュースケンはオランダ人であるが、フランス語の力を維持するために、ことさらフランス語を使って日記を書いた。フランス語草稿は1951年にオランダで発見され、カリフォルニア大学の日本史の教授が刊行する準備を進めた。一方オランダではヒュースケンの日記のオランダ語草稿が見つかり、2つが1本にまとめられ英訳されたのが1964年の英語版で、『ヒュースケン日本日記』はこの英語版の英語からの翻訳である。前半は船旅のことや各地の描写が興味深い。日本については外交折衝の覚えがきで、1858年6月8日でいったん中断、2年半の後、1861年1月1日に再開し、同月8日で終わる。ヒュースケンが攘夷派浪士一派に襲われ1861年1月16日に死亡したのは29歳の誕生日を間近に控えていたときであった。短い生涯のうち4年5ヶ月を日本で過ごしている。50歳のハリスとは違い、若いヒュースケンは日常かなり自由に行動して日本の国情に通じ、単なる通訳以上の存在となって、ハリスの任務遂行に寄与した。その短い生涯を通じて、確かに歴史の記憶に残る仕事をした。

今回、下田の旅を経て歴史に対する興味も大いに湧いた。次は、ニューヨークに旅行するときにヒュースケンの雇い主であるハリスの足跡を辿ってみようと思っている。

歴史の中に残る通訳者の足跡、その確かな実感を下田に旅行したことがきっかけでこの本を読み、あらためて関連の文献も読んで確認ができた。通訳者あるいは通訳を学ぶ学生には、日頃から身の回りに目を向けて通訳がどのように歴史の上で現代に至るまで役立っているかに思いを馳せると、さらに通訳という仕事への理解がすすむと伝えたい。

.....  
評者紹介：鶴田知佳子 (TSURUTA, Chikako) 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。NHK 衛星放送、CNN 同時通訳者。会議通訳者。AIIC(国際会議通訳者協会) 会員。

連絡先：[tsurutas@xg8.so-net.ne.jp](mailto:tsurutas@xg8.so-net.ne.jp)

.....

参考文献

ヒュースケン H. C. J. 青木枝朗（訳）（1989）『ヒュースケン日本日記』岩波書店

木村直樹（2013）『＜通訳＞たちの幕末維新』吉川弘文館

坂田精一（1987）『ハリス』吉川弘文館

